

## まねることから学ぶ子どもたち

4月早々に立会小学校の児童に出会って以来、とても感心しているのは、あいさつの時の様子のよさです。私は毎朝、3カ所ある門を、ローテーションで場所を変えて立っています。どこにいても、どの児童も、私の少し手前で一端立ち止まり、「おはようございます」と言ってからお辞儀をします。礼儀作法を教える本を見ると、語先後礼と、はじめに言葉を発してからお辞儀をするよう示しているものがありますが、子どもたちのあいさつはまさにそれです。「それができる子が中にはいる」のではなく、ほとんどの児童がそのようにできているから驚きです。



そのような中、1年生はどうだろうと調べていたら、驚きました。入学早々は、「おはようございます」と元気な声をあいさつできる児童は多かったのですが、語先後礼のあいさつはできていませんでした。それが、日が経つにつれて、そのようにする児童がどんどん増えていくのです。学年の教員に、「あいさつの指導はどのくらいしているの？」と聞くと、「もちろん、朝や帰り、廊下でも、誰かにあった時には、『あいさつをするのですよ』ということは指導しているけれど、『立ち止まってお辞儀』までは、まだ十分に指導しきれいていません。」という話でした。では、1年生はどうして語先後礼のあいさつができるようになっているのでしょうか？

そうです。答えは、見てまねしているのです。2年生から6年生までの誰もが、このようなあいさつをしているから、一緒に登校してきた1年生も、自然と同じように立ち止まってお辞儀をするようになっていくのだということが分かりました。

一説によると、「学ぶ」の語源は「まねる」であり、「まねるが、まねぶになり、学ぶという言い方になった」という説明を見たことがあります。1年生は、まさにまねるという行為から、立会小の児童に定着している「あいさつの形」を自然と身に付けていくのだと思いました。

そういう意味では、小学校は1年生から6年生までの多くの学年の児童と一緒に過ごす場ですから、高学年の姿から、低学年の児童が「まねる」場面は、他にもたくさんあるのだらうと思っています。高学年の児童の、学習に一生懸命打ち込む姿、低学年にお世話をする姿が、よい意味で、下学年の児童の刺激になり、「まねる」ことを繰り返していくことで、児童のよりよい姿が育っていくのです。そして、それが立会小学校の伝統となっているのだと思います。これから先のいろいろな場面での児童の様子から、そんな児童のよさ（特に下学年により影響を与える姿）をたくさん見つけていきたいと思っています。